



市房山神宮里宮神社宮司

工藤 維春さん(62=下城)

戦後70年、時は動いた

日本では、漁船など小さな船でも神様をまつる習慣があります。軍艦の中にも「艦内神社」があり、軽巡洋艦は、艦名と由来のある神社の神様を守護神にしていました。

1941年に太平洋戦争が始まり、球磨はフィリピンで参戦。現地で米軍にとらわれていた日本の民間人80人を救助しました。ソロモン、シンガポール、インドネシアなどにも舵を取りました。

魚雷命中、138人が戦死

1944年1月11日、対潜水艦の演習で、駆逐艦「浦波」と一緒にマレーシアのペナンを出港。マラッカ海峡でイ

ギリス潜水艦の「タリー・ホウ」が球磨を見つけ、魚雷7発を発射。球磨は舵を大きく切ったものの、右後部に2発の魚雷を受けました。積んでいた魚雷に誘爆し、船は沈没。乗組員約450人のうち138人が戦死しました。球磨型の軽巡洋艦は、球磨のほか4艦あり、名前は多摩、北上、大井、木曾。北上以外の4艦が戦没しています。

平成26年5月、球磨を含む多くの沈没船が、国外のサルベージ業者によって、引き上げられました。スクラップとして転売することが目的でした。世界中が「戦死者の墓をあばくような許されない行為」として非難。その後、球磨の残骸がどうなったのかは明らかになっていません。



1920年に造られた軽巡洋艦「球磨」。市房山神宮の神様を守護神にしていたことが3年前に判明した(写真=里宮神社提供)

特集2 里宮神社と軽巡洋艦「球磨」

～70年の時を経て、戻ってきた守護神～

町の氏神様として知られる市房山神宮里宮神社(工藤維春宮司)。縁結びや農作物の豊作をつかさどるだけでなく、武の神様としても敬われてきました。74年前の太平洋戦争中、海の底に沈んだ旧日本海軍の軽巡洋艦「球磨」。その守護神として艦内に祭られていたのは市房山神宮の神様でした。

日本最速艦の誕生

1918年、日本海軍は性能の良い米軍の軍艦に対応するため、高速性と攻撃力を強化した「球磨型」の軽巡洋艦を造り始めました。2年後に長崎県佐世保市で、その一番艦となる球磨が完成。大きさは全長162.1メートル、全幅14.17メートルで5500トン。「世界のビッグ7」と呼ばれた戦艦「長門」より1万馬力も強い9万馬力で、当時日本最速の36ノット(時速66キロ以上)を誇りました。4基8門の魚雷や7つの主砲など強い武装も備えていました。

球磨はそのスピードを生かし、主に人や物を輸送しました。完成後すぐにシベリア出兵のために日本兵を護送し、その後、中国の黄海付近をパトロール。1932年に広島県呉市で改装し、カタパルトと水上偵察機を搭載。以降も輸送や、艦隊の指揮をとる「旗艦」としての役割を果たしました。

沈没船が引き上げられて1年後の平成27年6月、里宮神社を訪ねた大分県の研究者が、大正14年11月12日に発行された広島県の「呉新聞」を持参。その記事の内容から、戦後70年間不明だった球磨の艦内神社が、初めて明らかになりました。まるで球磨と運命をともにした138人の無念の思いが事態を動かしたかのようでした。それから、里宮神社では球磨の沈没日の1月11日に慰霊祭を執り行うようになりました。海の底に沈んだままの守護神が70年ぶりに神社へ戻ってきました。

遺族会館に資料を展示

球磨との関係が判明してから、里宮神社には関東、関西からも参拝者が訪れています。工藤さんは「遠くの地のたった一つの神社を参拝することはめつたにない。訪れた人たちは強い思いを持っていて。私も話を聞いたり、話しかけたりしている」と参拝者の気持ちを汲み取ります。

現在、拝殿となりの遺族会館で、軽巡洋艦球磨記念館(仮)として球磨にかかわる資料を展示しています。「過去を知る機会は今も少なくない。どうやって、祖先が国を守ってきたか、知る機会をつくってほしい」と工藤さんは歴史を知ることの大切さを説きました。

軽巡洋艦球磨の歴史

- 1920年8月31日 長崎県佐世保市で完成
- 1922年8月～1941年12月 日本海で日本兵を護送、中国の黄海付近でパトロール
- 1932年 広島県呉市で改装、カタパルトを装備し、水上偵察機を搭載
- 1941年12月～翌年8月 フィリピンで太平洋戦争に参戦
- 1942年9月～1944年1月 ソロモン、シンガポール、インドネシアなどでパトロール・輸送
- 1944年1月11日 イギリス潜水艦「タリー・ホウ」の攻撃を受けてマラッカ海峡で沈没



1

海軍飛行予科練習生に合格した友人の無事を祈りに来た人もいた。今も昔も里宮神社は住民の心のよりどころになっている。2 拝殿の鈴の上を見上げると屋根には「武運長久」の文字が見とれる。戦前は武の神様も注目されていた



2